The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 強直性脊椎炎の有病率に関する疫学的研究 |
| Author(s) | 辻本, 正記 |
| Citation | 大阪大学, 1977, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/31934 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【47】

| | |
|---|---|
| 氏名・(本籍) | 辻本正記（つじもとまさき） |
| 学位の種類 | 医学博士 |
| 学位記番号 | 第 4096 号 |
| 学位授与の日付 | 昭和52年12月6日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当 |
| 学位論文題目 | **強直性脊椎炎の有病率に関する疫学的研究** |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 小野 啓郎 |
| | (副査) 教授 朝倉新太郎　教授 重松 康 |

## 論文内容の要旨

〔目　的〕

強直性脊椎炎(Ankylosing spondylitis, 以下ＡＳと略す）は病因をはじめ，その他の臨床面でも，ほとんど明らかにされていないリウマチ病であるが，従来，わが国ではなぜか極めて稀なものとされてきた。しかし，その疫学的調査成績は全く存在せず，診断の不正確さからくる誤まった印象が流布されていたにすぎないと考えられる。また最近，ＨＬＡ（ヒト白血球抗原）に関する研究が進んで，ＡＳとＨＬＡ－B27が他の疾患にはみられない強い相関性があることが判明し，急速に注目されるようになった。そして，このＨＬＡ－B27の陽性率およびＡＳの有病率が人種間でも相当の差のあることが次第に明らかにされつつある。したがって，今後のＡＳの研究の基礎となるべきアジア人種でのＡＳの疫学的調査成績が国際的にも要求されている。

〔方法ならびに成績〕

ＡＳの診断には現在国際的な合意のあるNew York criteria (1966) を使用した。

また，この疾患を目的とした疫学調査は，非常に大きな母集団を調査する必要があること。さらに診断には，骨盤部のレ線所見が必須とされるため，社会的な制約や調査費の関係で，厳密な住民検診の実施は極めて困難であるので，著者は次に述べる調査方法によってＡＳの有病率を推定する方法をとった。

1）一般リウマチ病の住民検診での調査成績から

2）ＡＳの診断要素となるレ線的仙腸関節炎の住民調査から

3）臨床的な「強い慢性腰痛症」を基準にして，病院資料と住民調査成績から

4）慢性関節リウマチ（ＲＡ）の住民調査成績と病院資料における両疾患の対比率から

5）ＨＬＡ－B27とＡＳの強い相関性を利用して，すでに調査された地域の成績を援用する方法から

これらの方法によって，日本人のＡＳの有病率に関して，推定されるべき妥当な範囲を総合的に検討した。

結果として

1）から，近畿3地区（総7552人）でのリウマチ病の戸別訪問および面接調査から1名のＡＳを診断した。したがって，ＡＳの有病率は 0.013%（全年令),95%信頼区間として 0.000331～0 .0741 %となる。ただし，これらの住民には診断に必要なレ線影響がなされていないため，この推定値はＡＳの有病率の下限値に近い値を示すものと考えられる。

2）から，住民調査におけるレ線的仙腸関節炎の頻度は 0.8%（両側Crade Ⅲ以上，30才以上男子）である。これを人口構成などから袖正し，ＡＳの有病率についても調査されている外国の調査成績と比較検討すると，日本におけるＡＳの有病率は0.08%（全年令）となる。しかし，この調査方法はＡＳの有病率を知る上でのいわばscreening methodと考えられるので，この推定値はＡＳの有病率の上限値に近いものと考えられる。

3）から，病院資料によるＡＳ患者とＡＳに必発する強い慢性腰痛を訴える患者の比率を，住民検診における強い慢性腰痛症の有病率に適用して概算してみると，ＡＳの有病率は0.04%（全年令）となる。

4）から，病院資料におけるＡＳとＲＡの比率（1：10）を厳密な疫学的調査方法によって判明しているＲＡの有病率（0.3 %）に適用すると，ＡＳの推定有病率は0.03%となる。

5）から，ＡＳとＨＬＡ－B27陽性の相関は91.1%で，日本人においても極めて強い相関があり，一方，健常人のＨＬＡ－B27陽性率は 1.5%である。これをＨＬＡ－B27陽性率のみならず，すでにＡＳの有病率についても調査が完了している各国の成績と比較検討すると，ＡＳの有病率は0.01%から0.07%の範囲に存在すると考えられる。

〔総　　括〕

これらの成績から得られる日本人におけるＡＳの有病率はほぼ0.01%～0.08%の範囲で，おおむね0.04%（全年令）前後のあたりに存在すると考えて大きな誤まりはないものと思われる。これは今まで報告されているCaucasianでの½から⅕の有病率であり，わが国において従来考えられていたほど稀な疾患でないことが推察される。

また，日本人健常者ＨＬＡ－B27の陽性率とＡＳの有病率の割合が，今まで報告されている他人種における両者の対比率によく符合しており，日本人のような比較的単一民族における著者の調査成績を参考に，さらに検討を加えることによって，ＡＳの有病率に関する未調査地域でも，ＨＬＡ－B27を標識として調査すれば，その地域や人種でのＡＳの有病率を効果的に推定できる可能性が生まれた。

## 論文の審査結果の要旨

日本人における強直性脊椎炎の有病率を，住民検診などの疫学的方法や，レ線的仙腸関節炎の頻度，病院資料，ＨＬＡ－Ｂ27の陽性率などを基に推定した。それによると，その有病率は0.04％（全人口）前後と考えられる。これは，従来言われていたほど日本人に稀な疾患でない。

また，今後の有病率に関する未調査地域での効果的な推定方法を考案した。